

羣書類從

三百七十七下

内閣文庫			
和	六六	三九	函
内閣文庫			
番號	和 18690		
冊數	666( 469)		
函號	215	3	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





神皇正統記卷之三

神皇正統記卷之三



神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記

神皇正統記



群書類従卷第三百七十七下

浅草文庫

檢校保己一集

合戦部九

應仁略記下目録

一月十八日御免神前合戦の事

付五月十六日大乱の事

一京中四祿在取粗注留むの事

一公家仁く可く暫住する事

一過去帳三國傳記

付前近江守家後の事





并十首和歌は記のきに叶ふ事

一今出川殿伊勢乃國沖下向乃事

付翌年應仁二年沖田洛山山以下不思議成行

乃事

并伊勢の事 貞親 再出る乃事

一去永亨十年塔峯在陣の時 上意一と左京太

并世保大膳大吏討死の事

一光岩山右席坊以叡山以良山大天物下清なる事

正月十八日沖田神事おせん

付より年月正言  
大礼等の事

當年大礼はあつて現起する事大名列して訴状

と親へ武衛のの儀と執奉行して右根に歎きけり

起きりて謂ふ一家の中より二人のよりりて

と後小随ひ鼻を弄て出はと後と事同閑筆

是よりあふ家代々のと裁先親とすとはと

あつていせの事 貞親 胡礼より起りて彼等のあ督入

勢く篇くを量成来て近年ハ義敏西国に

流けていふ乃上玄に随ひのか物家の為ハ

の計畧と成来て此はと都の中おきけるゆい



なりきりて内縁のよりくはけし貞親とるはふ海と  
凌ぎ出しと私の義と執續の事とるはれ吹  
を招くに似たりとて一切と計ふには許容事  
た一貞貞親私あるにやうと方御胡礼のふ事に落  
居るはけにいていめふへうとるの意諸大名一同の連  
署教々衆多領より事と細川を因に餘衆より  
板家と致し衆自へち  
にあり其の神沙下巻といふあり  
あまふより伊勢のも是に相國寺慈西堂醫所の法眼  
女中よりわき沙汰よりとる九月八日教のふ  
没落し年ぬちのうは衆教のうとて安くせん

帝都と出て越前下向とてわいて彼の一落衆安法  
の思ひより大名各退散とるはうに京中上下誰  
とるかきとも大新事年ぬ下静ありと角とる  
をいへりあり然るのまじ事有へとておとと私語  
こあへと衆のこく衆後ともわく山名の入道清つ  
乃佐出の事を申し沙汰とてと始とて庶子想  
領の諍ひ不領相違の懣憤我もいとおと何ふ  
教ひ手とてとる如くと方八代は御父貞親を  
たふ御扶持あるとて八も餘八教または天下とて  
よかりとてとる中んはあま三年の先



素素沖出あさ事と院居は、計畧を廻りし  
沖兄弟乃内侍上院のつと一流三子の沖法灯を  
よきとて、武將の誼と授けしものありに、後素素  
歴々と沖出をいさへ、今ハ玄用の計畧をめぐり  
此代様うう、その中に今出河原の権勢と方に對  
して貳三ハありはさしきとも上裁に并ぬもの  
安らじきものありはさしき朝家ハ皆重醉の内分別是  
味と計畧に力をそく風情ありと理りと理りと知る  
道絶ハはるにれきの種と成ると云ふなり、今度  
山名の入道はよくて清つ佐安城の一版、沙汰する

やらむものありはさしき、是ハ方國播別の事、入道  
一朝の中に沖遠返禁憤の至極むと令んて月  
日と送るをれ武門の養をとり執都の中に中  
中、与黨の力とて本まはせし謀をとり、大  
名指南ハは成敗と廻りし人清つ佐出洛の事  
知思ひのまはさしき之既ハ上洛とす、内當年より九  
年一夫と敵は清く切麗なり、名をとり、教を  
乃都入八幡より路次の近ハ山名の入道とて、  
うきとふものあり、教とて、人見す難人雲、素素  
とて、うき者八幡大菩薩の化育とて、しける意で



より其用より有り千本の小路地院とて其集  
と定むる方御礼赤後の出仕方々此出以衆暮年  
始の二儀子秋百衆の祝云く此山名を指南とい  
るようといふ武清方以衆の祈に似たり尾法のも  
面目と云ふと云ふ法も所一留山方のなるといふ  
され赤□の出は衆暮年御礼年始祝者一事遠  
くは佳例相違ありといふたり一家に二人のまありて  
鼻と云ふ出仕と致も事天下の礼吹玉極せりと  
武清一家のま振といふ名列して祈状と挙げ貞親  
胡礼の題目也といふ一祈状は思儀やふ二の舞

たり天下やあ家の大名入替へて亦おまゝと成より  
云語通りいふ後小留山方青陽と云の祝云  
私に就て例年に當り属おをまゝとも恐敵國をま  
くともまゝにぬる大議をありと議と補ふと  
てもおろかりひもあつとに敵方具負の大名とて  
子黨乃幡と重ぬる敵既と帝都の内は逆家一家  
は安否此時ありといふをまゝ衆暮年の賛詞をま  
は今八偏は細川方の助成密談もまゝといふと  
正月朔三日の祝云よりいふとて天下八人我がま  
よいふ事ういふといふの思ひておと待根つる



心づれある所の交同く十四日今夜は長夜京中のあ忘  
事に越する神之人の何事やんと思ひ居るの交  
十五日未明諸大名とてく御所の市つお後雲あ乃  
とて集ありと事の振大略と名入道具行とくから  
子細ハ誰とも知人ありとてよりあ三日ハ退交せとて  
夜詰の極勢云語及び不承出来と京中大名揃いと  
とくするに畠山尾張のち出らせとてハ難成と  
とてするに十七日の夜は計被方火のち挙る事ハ  
内者大遊佐神保と初めとて最後五六町先程  
一夜に焼きとて蕪とての焚物あるハ細川一保

成て一弓矢執て荒も角もぬんと云 淡合規おもは哉  
 心然汁累るる能きに大なる相遠楚忽の振舞ひ  
 を故に山名入道すまじき諸大名と催して御取巻固  
 と致す祈りて亦くも禁裏仙洞今出門敵と將軍家  
 へ還申先軀家と吾らもと成澄と用意の役と怖  
 しけき則十六日公方よりまじりといして今既々大礼  
 に属さんといひ尾別合力の一版ねて<sup>すけ</sup>技指と云へし軀家の  
 安泰と云はん秋の力と費しと云ふ論あるの旨御因書  
 致せざる京極方おありし御因書と云ふこと時の度  
 天下の執巻と云ふありき今然し然ハ天下太平也といふ



にね似るものと裁く天下ありに上民の重仁に悉く將  
軍は神にも相違ひてあり送り候内より下に在  
ありといふものと裁く遠きよりし神使教を度に及ひ  
ぬき八年未だ終の場とて下りた大事に別れする  
風情ありとては應じて子細及く人と神清と事ハ  
十六日の晩景之尾刈我々亭と焼拂つて押へて帰る  
總ふ事ハ十七日始末する所ハ教制黙止し難き  
よりし此後をすい今日ハ武つて義理と捨道と捨て多  
日知者と絶て進退惟絶て是非亡慮絶てり去  
程ハ尾刈の元ハ夜すのことも曉天にありて後須

へ案内を啓する事神とてとて之も彼方にあつ  
ハ典廐迄のことも餘りありとて送る事ありや  
同くして送る事とて楚忽れ自燦後悔するに  
ありけし上力をよく人早知底の一点近き付し神  
乃社ハ用義ひてある敵と待懸くところなり  
己名の入道と大切といはれりといふものと裁く一  
家への大名公方の神つと送るなり神のお後一系  
面より諸大名の勢立てあり日方間の対置ありの旗  
花と持てる見れ軍勢雲霞のこころありし退治の業  
目よりとて則十八日の午の刻相國より一系面とて



と渡りあふの大將清つ乃佐□勢二千餘騎山留相  
國ものうらとあつて此其の神おへ押あつて武清の  
手新金彈正た清つ馬上三百騎是もお出まのふへ返  
つて河崎より道祖の神と廻り山留のふよりあつて清  
其の西八山名方の手端を織田端あ大將より五百餘  
騎清其の社を襲ふあつて此方の軍勢一夜は討たる  
と合さるより上八梵天下に堅牢地神も動揺し給ふん  
む洛り利庭まればあつて修羅園靜のふ叫と告ける  
恭ふとまのつて平安城一仁國常は清襟張驚うまふ  
是風城陰柳の始めたる役り城の田ふは十餘年

一命をまゐにほと今日と渡りあ戦ひ思ひ役あ  
清其の井蛙の園をさる風情にて三百餘騎あふ  
不存をさる顯うと園と合さるかくて追ふの  
合戦とつてあつて清其の水面を井のふより責入  
城其命をわらふ戦ひあつてあつて極勢入留く  
闘ひあつて小路に狭く人あつて大將清つ乃佐い  
下知ると互に肩とあへり傍輩年来隔之の悲敵  
と本あつていふとあつて名字と顯うと面とあつて  
あつてあつて此方の勇士あつて入留し責戦ふ事大  
あつて散ると風情を築城其の痛く働きのあつてあ



く討つての午時刻に晩景申の終りて息と著  
も戦いよりあ陣の軍勢あつたのやとて懸けけり  
敵の方の死人数と種々うらうらおひ教部も  
討た討つてにやふ日も夕陽は傾く時尾張のも  
宿坊に火と懸て城元終に家もふりてそのあふ心  
を同じ尾張のも成目に懸て責即けり大津元一令  
と盗まうるあり終り大將尾張のも運令うに  
して夜の間にけり方ふりて今日難成と通す  
是猶大に相續を奉ひするも九南社に武家代々の神  
其故も神と号しする當家も宗根源也和光の

場離るすも血と流るる属様とて紅蓮の湯も  
神おに流へるやえ正者陽の收ひも下皆無と  
と朝家も不吉なりと始りて言語道断くく  
相聞寺に隠るる若く家落武者た少く明日生害と  
とまの家に細川方上意に覆るるもて南庄とて  
通しけりとも大將いふ生涯とて通し通ふと懸ふ  
縁もそと人流に随ふ落武者た二百餘人あり  
皆大將も随ひて又細川の橋につき後城に寄る  
よりよりやとて大下り大依とて氏の霊神と懸は  
あるとて敵も大將もいふと生る人留むる



名ハ二門ヨリ入るも入居所の跡と見えハ灰燼ニ成りて  
焼野に人跡絶て滅亡せる今とハ四祿の沙汰と逃  
走しに彼方五町十町の間ハ多類の外ハ悉く類ひも  
見えたりける將軍此家に天下此職とも家大家武清  
留山  
あ家ハ同一神に錯れとる細川計也今と一家ハ一統  
しく是非の沙汰をなすべくに此家の知者に名とけ  
天下此日遊み出来とるふ里の跡ハ一歩より始まる知者  
を興ゆる縁と成ハ始終と搜括して世と治と入  
むへ一旦の知者より一船の煩ひと行事ハ有者傍の  
謂とやトさんをもと慮とす此者ハ述と憂へのつと

いりあつて山名細川一家の縁なすむとに義敏お  
人新詔より恨みのともありてに御免合戦以後  
自一家此契物を川替て怨害はとるふ名の人  
禁裏仙洞を將軍家へ移しあつ衛門の佐と搜括し  
ちける述とこの役細川奉るの身たんと世に成る  
止るもの細川方多年多日の苦勞一時に留と果け  
るも天下此日沙汰聞は胸を焦と者彼方老翁に付て  
幾千万の人御ん撰あんと欲するにとるあつ此と  
いへとも面とありて念を散とる一色ハ見くさ建と二月  
之月より京中のめとあ家方國と在くあつ聞評云



計り多しと云はば十餘年の將愛只大魔の所なり  
見とて隨縁如就して改過とてと格とがた細川の  
分國より群勢より集りて既に倭寇もあまに時陣  
を張る計也山名武清の方國より勢の付事恒少の  
ふりかくてあ家敵く如も八年來の方名との御成  
敗に宿之張合む大石のつても終の落着を顧み  
今ハ偏よ武門のち執時を答に席伏とて時より  
勢り今日の振込大石猶如斯いふや小石氷石ハ順次  
人新詔を指とてとて不肖のあふ計り人天下ハ皆  
訴をよりて身とてとて乱惡をさへとて驕横をさへとて

都の乱吹ぬを得風情ありあんのとて成り又月六  
日細川より山名方へ押寄するといふ山名方より一乗村雲  
の橋お後あまの合戦也と力くくの山名二はよ方  
ま家くの方國より上り集り軍勢くつひの旗人  
心をけり見おがハ早時刻到來とてとて早朝  
巳午の刻分軍始つて申酉の刻よりはあ陣おて出た  
かあつて高名記とにあつて八年來盡命を死する  
家くち執勝方なりとてつえりてその日の夕と日と  
警りて治りて大伽藍 草堂 百万偏 雲み寺  
降善提寺 猪熊殿 新名光寺 佛心寺 廣光寺



田具寺 廬山寺 風呂廬都一系大ま裏向の酒を  
土倉小家民屋にあり云 諸道断の事大出来  
と 翌日廿七日安居院の北に房をよとと云 清光  
法平在世のいふ人法統と人賛持と 彼東山念賢院  
の陳終の告と云 時と建暦二年正月廿五日の曉方此  
坊の持佛堂に紫雲俄に指来ぬ法平後夜の持法  
併に光明震後の観解事お小歌と云 彼紫雲持  
仏堂より一に壁妻戸のるに留まり是は吉水の法統  
坊多日の賛約を告と云 是則未明は東山へ召来  
に此曉往生と云 未未際小奇持を始せ 彼紫

雲の間もいふに 厩候とある 苗院主家門冷泉殿下  
月次の往生講彼持佛堂吉永海行後のむろと云  
多る代に説道り名室いつら 若に立還る院主此に  
叡山山谷寄宿と云 心中素と云 落涙をいふ  
九日大宿寺庵在家と云 云と云 同六月七日  
禁道場前後之田町焼を云 如次日十日下の一色殿  
より火おし 近湯沖水路より東八町面より一系より 宅里  
田町餘不思識風吹て横堅十八町に焼生し人死ふ  
損滅より其後八日と云 記述を述いふ事この目を取り  
記録と云 云と云 廿六日合戦初つて大協藍原候



一してより家武家僧坊人をいひての程の如く損滅を  
靈佛靈社神駿を失ひ以法破滅時既ふいゝまゝ  
一この日限わくの倒惑翰墨に既ふいゝまゝ  
去来ふも随ひてありゆ損滅の如く憶持ふあり  
おのゝけに随ひて過去帳ふまゝありの如く

華堂 百万偏 淨善提寺 新善光寺 佛心寺

廣覺寺 田具寺 宝也寺 二福寺 地持院

猪熊殿 安右花坊 八月十二日折善願寺 崇福寺 尊持寺

觀音堂 河崎 長講堂 城福寺 禪心院 秋野道場

清和院 藤道場 堀上 宝傳寺 慈福寺 自細川為

實相院教 梶井門跡 大内言の陣 白毫寺

大德院 八月十日 毗沙門堂 同門跡 相國寺法界門

淨光院 九月十日 東北院 伏見殿 八月十七日 鷹司殿 近衛殿

觀修寺殿 日野町殿 一条殿 裏松殿 大徳殿

日辻殿 久我殿 日野殿 轉法一輪三條殿

裏松地殿 九月十日 万里小路殿 今出川殿 中津門殿

松本殿 九月十日 三宅院門跡 九月七日 馬丸殿 同津庵

西園寺殿 花山院殿 八月十二日 綾小路殿 日奈殿

正親町三条殿 伊勢殿 下伊勢殿 武清左史 卜殿

津殿 六角殿 上下九 一色殿 右大臣殿 波多野殿



赤坂新々清庵

八月廿日 永極庵

九月廿日 布施教

大津乳人

播磨庵

藤宰相庵

細川豊洲

武田庵

伯庵

九月廿日 肥別

奉行元慈

吉良庵

安禪庵

一乗より上 杉河等

觀音及縁  
安張が寺

一乗面 地苑堂

傳教大師  
所作

常樂寺

### 過公惟縁起等好事

此抄記録のまゝに當代記惡此因果在る而も乃死ん  
其交名をきくも佛子爲一念の廻向他事ありとて  
縁利物のまゝ之毎に自業自得のまゝひ自他不二の觀  
によつて開悟する先蹤をおむるに堪ふる云々此を  
傳記一卷勸へ出せり云々是を以て就とも後見のいふ

いふ依作ありて誦經念仏一終ふるに彼傳はいふ

天竺より那摩陀も唐朝にハ解脱正も

三千七百人の名あり 彼寺

に道心堅固の傍ありとてふ大惡人

在家

不斷教

化他事なり阿難達多の兄弟然とて此僧おの

やう依身より依止とてふ事いふに似て漸く

佛道に引入んとて時心中押へて出家の形とありと

儀光と号して沙汰の位を經けり出家の後旧惡

いふ現起とて猶惡行を修め道心に莊嚴道

場ありとて大伽藍を造りて之に神の令り觀音の

像いふと此中を一神一面盜みて湯に涌りて高



使ふ此時命縮まりて必しも无间地獄なる事  
 象を射るよりも早く時ふ三千七百人の仏菩薩忽ち  
 と現して正諸法不圖魔王因果の理をあらに正法  
 念經に云某人の若輩をうけ人の作惡をふとに氷  
 自業自得の果之无生界をわくのこゝとより逃る  
 こやうと違ふなり三千七百人は彼等こそ現在帳乃  
 流るる俗家の若より兄の僧此者名字を縁縁の爲  
 此帳目入をたゞ悲慙れ積つて善縁に冥とて違  
 によりて三千七百人圖王に對して回着あり此等自  
 若自傳れ過理を覺くとも小乘權門の教育ありハ

正法念經の金言去就となりてあらるに解脱正等  
 二向大乘も修行遙く小執に異なりとあるなり彼  
 三千彼く三千才遍亦ふと執するは道理若愚互  
 具の智光を耀う彼く三千の勝月を暮門で彼愚  
 人を引いて娑婆世界に藕生やむとて是ハ理性の  
 融通を以て高座の害を遁ふとて亦大乘のと  
 まりて其始の舊業を償ふ事法用の菩薩が  
 くのとてめりや人ハ地獄とまういの淨土の理を引  
 替へつるは因果を示さんと共に烟の碎珠の叙と  
 して右の脇を突徹とは若惱に乞利果て彼者



大誓願を起しとてなりあふ生涯と見えそ日と  
叫ぶ叫んで息あらず蘊生れ一念あまたなりとて後見  
り信を生ずれ仏とてなり影の形も随ふとて  
思惟を教へて大誓願とて難行苦行とて年を  
はむ順次ふとて舎兄の僧ハ前に往生し後見  
より後に解脱とて傳記あり凡六親眷属とて生きたるを  
とハ之始より以来着有る迷執ふりてとて悟道  
り教を引事とて縁によりて顯る佛種從縁起是故  
説一乘の令云是なりといふに況や梵網經より一切衆  
男子ハ是我父一切乃女人ハ是我母乃至六道元生

分ハ是我父母とて痛うたれやとて人界れ  
はとてけて電光石火の夢れせり金襴蓋を被れ迷  
輪小沈ん永く信知の苦域を迷ふ其家ハも家  
より出て家をうへあひ他家の人ハ他家に因りて  
人を損も或ハ廢子の果報と厭ひて想煩の權威  
と望み或ハ倚靠を求めて出身を棄てんとて  
て下れぬひを引出とて名望と顧みハあつとて  
の取ら夢のこゝ身もあつとて悲愴會苦心を害  
する若惱なりと孰ハとて訪ふん三世の習因習  
果あまたなりハ願にあらざるハ果報二十年



絲つて國を損く人を損く事とも福業ハ己の  
報おとみうり惣然を望も序曆かこひてはひ  
惱まてに中を遂ふ大將ハ一人もあふとてさう  
を冷あふに浮雲の榮耀付ぬへと云一族乃流あり  
一樹一河猶お世れ繋り之況や身とや身家と周り  
肩張る膝を組親子兄弟老後家人とさう思毫  
にあうら我身の肉より火と出りて人を焼よとに  
もハ家身を焼なり愚なるハ重醉の凡才拙ハ  
末代の我も之をよと武つもの毒を失ひ人を損  
ゆる事ハ是より下のさ大國土をねむる道之をに

朝乃怨敵を執り國を靜むる道り此ハ毒を空

くくそ益なりハ道理を顧みてはのほり自害を

ハふれ六角近江も詳先守もふハ云々長祿年

中江京極被官に付て兩家確執出来し京中

血を流し分國の乱治定とみうりつ井の落居

六角安念を極まりは後ハ卷六角の記のあつるに云  
トに要細と云ふこと

念を交しそ宿意を遂ハ京極に對する題目忽に

雄雄を決しそあ依くハ一家の中此自滅之惟史

にま下の御用に冰も是冰をさうり怨害を募ま

と近江ハ乱世と成り分國の痛みあり家の子多く



損してゐる家の衰滅餘りも不來同東の來る  
方を公のあつて本私を貴くして天下に對してま  
ゝ不孝乃逆俗となさん人も道を乱るゝも我何  
ぞ驚かぬんつゝ是と案するに面目を公道  
に對し一身を果し地を人をも失ふと國をも不  
損を深矣然も朝にも先來まゝの教をすも賢仁  
存日常恒の政道と述べて案する人  
未だお慈を以て名仁今の代ふ令しめてその賢哲を  
あふ汁之長時驚か合し人々親疎を以て若く人  
多し少出るとに隨ふ名にのめする面影を答ふと云

帳に留めしる迷の中れ是非は是非に非之愛乃  
中れを云は有無たに云く  
一 あまんとたみくしてさめぬ後うも愛もうも驚も  
と云ふ秋の月を以て連ぶにハ

何の愛うつも更にあふものをと

道と云ふるにわづらひし人々と對し

花もちりせし便果る人もあつと云ふ

むうを思ひ當代をわづらひに眼あけの境界何事  
う菩提の縁にあつと云ふわづらひの教推言い  
人もあつと云ふ或るに云ふ天下神祇冥衆の法



とて十首此和を和老の室におき戸のるにおく付て  
 愛のゆありといふ人のあけらるん艶と年のは  
 哉とわりの書□してとて悔にほくあけり彼首  
 念なり世のうき世とてとて縁ぬふくくさよ  
 代のうめに静ふ道の末はく捨る今もわたりやハ  
 膝を組と肩をあひる涙の二つをさる世にも今  
 眠りと親子の中と逢ふと欲の使ひのふく事く  
 轉るく今代のうきに思ふに悔に思ふに思ふ  
 身一川は世にあきて持るや我をさるく殺るん  
 今の代り人のうきとて風強く浮雲の持る

引替て治るる世代を待はる世へ行くもむらたの雲  
 世のうきと雲の近へと成るまゝいとふ人の志けさる身  
 ちるやうの世のうき目もくわや身をたふさる  
 己と

後の一首此ふきとてとてとてとてとてとてとて  
 和泉式部保昌に荒めく世とてとてとてとてとて  
 貴人のふに三七日冬終り恋のふなれ事と□頼  
 行誠を致しける思ふ神とてとてとてとてとてとて  
 てとて不思議の取うく世とてとてとてとてとてとて  
 ととてとて式部ふくふくふくふくふくふくふくふく











土とぬきひつゝい名をさしにすさるゝ後との小庭内外  
の火床茶震の綿帳賢聖の画 畧亦くも妹射山  
此仙居□皇の宝刹然ても忍るゝ途を志し只後とあり  
おやいづいづに呪や乾坤道いつて□陰陽と和  
と日月いさゝけ地り墜とともそりし物なりはの  
りりたるなりとふ代とるなりと物さる様と観し  
置事言なりい慮絶ん諸を惑とす之威ハ折政折  
縁の後ト威ハ之家執柄の火信家大元長良信諸卿  
上雲客たちもちに後と乃交りと捨て測るゝ田舎の  
塵よそと移し九まの月を雲居の布に隔てけ

あるものゝゝゝ旅客の物指見は是れ一法とて人を  
さむいさやうなり中にも百里の小路儀同之司 郷  
幼年弱官の世の如くより真言の望みおとせ 仁小  
おとハさつゝゝ勅許をうけ東もの辺よりくゝて  
密煙小入る長身と初にあるとあり貴行の身と如し  
ハ今彼彼在所々との後ハ叡山西塔院ハ谷榮泉院  
に承告しゝ之密の觀月を洗されゝりそ外世と眼  
み多と観る有士月卿雲客威ハる聲乃音に交り  
或ハ吉野の月小はなり山林流浪一ありと五歳月并  
江別東西なり山家と城安んより仁稀之め如ん



終るりと限りと知へる國くはも社中祈或は押領或は  
中祈知りと金うす人なりとせむる九月の末相國寺  
南禪寺とてその後ハ五山此佛光教千人長老以上東堂西  
堂老若沙喝在く知く哲位一多々ハ坂中山上有縁小  
月て寄宿とて酒を公舍有社乃寺都て京中廢  
滅り隨ふ程のこひあけて汁ぬへくハ大酒松本  
戸道は教過作本堅田以良小松賊士外在のえまて  
も知と□てし人され若くは部路の跡んと清ぬ餘  
所の涙初を絶もるは也た之八月某院ハ裏あて  
將軍乃清不に押毫ら進ておぐくまやハ天子此清

号ハくや人さ清風情を聚る中に武つをえと  
將軍の家にて職をもちハ一天四海の擁護德を以て  
必とれさたり夫と家に入るとも中なるにけし事此  
情と業とる人と精む情識教人に誇る愚暗國家  
と事後と源とたもさ初五月廿六日の起りハ細川  
清康を賜つて山名を亡さんと企てく合戦の七月八月  
よりハ逆寄のら夫と來て終るハ北道の際奉行幸  
とハ沙汰と治罰をく徳といへともて是と辨さる  
れ治伐の徳も隠没せりとみく清康をくおも治  
征の効もあまに似たりせのうみ人主九十五代後醍



嗣の天皇東夷の事をやせん爲に綸旨の大意  
若文を載る草葉八音田の中納言を方々郷土に  
勅使八百里の小路の中納言宣房の郷之勅使國東  
に下着きて既小勅宣の趣を承りて綸旨紙渡り  
相摸の入る時秋田の郷の女に付し請取りと除  
えをむとせし処に二階堂の出羽の入道と蘆屋と諫  
めしりなり綸旨乃若文を載しきりて先例若物  
にも申す所例ありし寸九人輒く除えをん事思ひ  
ふりて事二七日愼み納め置き御祈禱元小  
作せしと元地類に理りしとせしと除えありしと載

乃越頻よりけきしと相摸入る用ひしと何れ若人  
て秋後右房左衛門利行物書也讀長とせけきしと目  
を建鼻血出て讀果とて退おしと日の中に血  
を吐て死にたり時読者又及んて道塗炭に落しと  
之とも若人上下礼を違ふ時いさなり仙神の罰もある  
るも人皆懼れ違ふとる事記はせたり彼ハ元弘  
年中より以來此應仁の世も現量とるに雲泥乃  
道何れ是ハけ上下若人の道何んは氷と人さ哉凡そ  
其際をよりとけ乱何ふと方を治る者若人さや  
一夫の若國家のありし責一人小作ととみ終る次



馬に侍り女房并に夫人法師諸出家の尼元達各寧  
を以て園を於け思ひくつ沈淪目も南く連なる風情  
なり教里修学院鞍馬寺八雲大東家にもある山  
賊の用居禁の庵乃冬新里同人稀なる雪に樞  
の樂今今日憂へ雪月也乃教ひハ新を於けと戯  
と一葉麝の香とせとくの衣帯へあくの物指て  
さあうと夏の月れむととあるの東山西山の寺  
清春日所社系の車と所幸院寺沙院東連日乃  
山遊一日の所勝ありやの程の沙解念浮雲の景耀  
時遷り事とを枕中とく年寛正六年八月八日後小松乃院

三才所報恩忘仙洞所懺法議の事門跡の僧正三田  
末連從元日く出仕魚山の精舎主母此聴を警り  
此處の裏に琵琶琴の沙調へ伏え風の所機音類  
記ありとく合まうとつ跡の老若三井れと綱最  
以の元元南都北嶺の律僧庭上に色と文へ官中に  
花簾をくくく之居る郷堂上堂下琴瑟堂候乃  
律曲蘊香萬秋乃秘傳七日法會の壮觀一如風雲  
弟目の如ハ亦胡も人こ日城待もとおろ也誠り如  
家乃御名抄とくあるりわくし所懺法議以後同元  
宸筆此八議より奉行ハ旧例は随ひ諸家の記



録旧貫を撰寸王家の威儀といひ上代の先蹤といひ  
邂逅の教議起させり中にも室町後乃御出仕一切  
如山後此御例を述るる目これ論鼓南北乃龍象戈  
智玉を琢さず扶月を周く殊に此御議より先觀  
よ任勢て山つ三井の位侶收束の碩學公法に應を  
度くにて衆の聽を驚めし會くに講法の地をまゐ  
測り知れども護の神祇冥祐も我々衆の御願を  
就めし後乃んとおちろり次中日大行道の次  
身右方た方の樂人八曲盈満を比し就以鶴首乃  
船を浮へ船中より風波の曲を調へ出さば雞籠の

舞樂成楊乃上に始むる後乃右の樂人庭上に先て  
糸向の一曲を奏し一曲半つて伶倫おに進んて列を  
傳元□の句を唱へしハ奉暮るに今も園白後  
室町後をさしめし月卿雲客

行列次第  
後乃の

おちろり

の歩牧令詔を傳りて此神を貴く日光照耀し夕  
天に及んて猶巍くすりわくのしりる庭の勤免  
今一朝のち振をふに曇都の出せと待ても待てし  
ともおちろりとして洞中の所及仁平四年の御情  
より今夜にむりしり

此夜  
北河代後乃因院

年  
寛正四年三月三席御遊  
詩歌  
當年  
應仁



一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、

一  
一  
大

依天下大亂室町後長祿辛酉九月冲出家涉戒師  
實相院增運僧正号宣下以永<sub>七ヶ</sub>文明二年<sub>五十</sub>

二月十七日 ☐ 浙山朋游 涉齡五十二歲 游劍導惠 ☐ 長卷一紙

佛德行詩頌  
管鳳生  
繪秦篆  
入木  
龍翰  
畫圖  
等近  
朱

此聖王と云く往代將來爰此紀録一覽乃内の電光を

里むうを慕ふ袖乃洞ハ貴賜たに齊あふふ氣も

云々

今出、卷八、新編の、  
異翌年、佛、佛、

付多武事合戦一色世傳生伝事  
 上江録より  
 先禁裏

卷之八

仙洞女を室聲を勧めしより將軍家に移ししを

去後今出河後、  
葉内を啓く、  
去る同く將軍清和に

入中 俄より 纏頭事 旧年 如所より 上と 公方に 對して

ふんの御義海くまゝに軍中より事云々

と次少之を遂にふりて東乃御軍より西の方へ遷す

類ひなき多し時勢に沙汰ありき事度ふ所なり

事蟹の足にあらざるを假人一底として

たす勢の國、公司の諸生、とて云々、何れに於て、此等、依りて

此と隠密の義を以て上つは違ふ此企て神妙也

卷一百一十五

三



とて之をよるもさきにうけて十月の初帝部を御出  
伊勢の國司の鑑生の山家へ入し寂寥の采居也  
懐とおちんたり則上をうけて國中半毎の御成  
敗あるは今出川後御生國を助けしをとも御中  
也上をうける上と餘依なり國司をひいて一國平  
嶋は執少法を多に當ふのも護一を方今夜西方  
と如し御敵するも國の守護有名を實なり今  
乃世保孫三郎政康公方御軍に参りつ奉るは惣役  
其謂まはつて去るる二月<sup>廿七</sup>日<sup>ハ</sup>活ち入しとるもさき  
よつても護方より半毎のよりを追執國中平嶋

執少法を國司の手を念を極まり今世保多年軍  
人となりし其創めを為るるに父の大膳大丈<sup>為頼</sup>  
天下に隠れしより取ありとある上臺廣院後御代  
とさきにうけて去るる永享中平多武事在陣の  
時伊勢長將教作討つ陣取にあり<sup>云論の事死</sup>  
以来子大宰人となりし并よあ乃一をた系の本  
史同く生涯とある人たに背さ果ぬる此題目は  
あるのる態を多くハ頼軍に裁とて下隠しあり  
言語道断の事た也さるなりとに三年先より公  
方様より知るに付し一をハ武田并頼列あ入り



傳付く事然りとて之も陣中の時宜事なり  
大車乃時日と送川で罷りて之に當年十月月京  
都におわし思食初と後付く之のまに心懐お  
遠より假令加の軍中其間一と乃女中の方に□  
石に應て驥乃中より如中自告せり所使の人忽  
生涯とけ事大和へつる先には京を生涯勢  
しむへこの旨京より使能脚櫛の齒とてか  
わたり武田より是悟の事之計りあせり用  
この裡しを怖る武田自守一と陣一時小富と云  
在而也  
至て明日日十二私の陣を入り夜に別る所目小然へと

乃お公方より終るとし永陣幸芳終る所遊連く  
窮屈を涉るひるへこの旨耳くとし定むる後一  
と乃後見羽伏菟頻に御りて之の由り為れり  
と之とも既し面を以て頻章の上は是れ及るを明  
ふす日武田陣取り出川騎馬の元随分の先士人  
と之れ羽伏菟石川之方信長ト至己午の刻亭  
主庭上へ出向石請と騎馬元各座敷に着れとて  
ええ一献も始まりて之に合の隙子と用まにみ  
方より拔連きて切し然上と角とさうりまゝと  
系を吏為常に腹切半と騎馬元各抜合とてし組



引組生涯より口中一番に羽伏菟青の越中と指  
違へたり次小武田の中いびきより迎見の陣正中山  
乃氏社小出合より其外八庭中へお出討北より其も  
あり南庭十一人彼は十七人生涯と陣よりあき  
るも乃氏は皆一同又腹を切より口十六人とやら  
禰列の手ハ搦手と清取し忠節とあきより次世保  
大膳大吏事乞又長登上意に随して三ヶ年並より先  
悟の事也一色角とすよりより世保の陣より三輪ノ  
押寄たりより未明四方同時より周をそそ拳なり  
けり世保乃内軍なり志田見義家乃子山田源正源正

之精云四村の出雲山九乃年並大出合あに防戦  
如事火をよと風情之諸軍中隠きあり勢云  
た矢時を揃へて射掛ぬ程あり左あり右あり  
へと振舞なりは後者の陣なり未明外討なりひより  
よりわし郎より搦手猛勢をとり突懸きより番毎  
よりんに角よりや日本國にびきよりより取大の  
世保大乃剛の武者付随ふよりより口大八天の如  
なる勇士よりより今日を限りよりより一命と惜  
む者一人もあき皆人お下知し随へりよりより西別  
よりより入替よりより責付よりより城に随合の者



尤少あり追拂廻向丸ハ等々迷惑の神也あ方死人  
 救をきくもと子輝目誠驚く寸止方大將大膽を更件  
 の大長古刀を以て折ておんくけり誠四村乃出雲  
 へ横等々乃大將あ三人俄お對して古刀折あえと  
 面くにも作く寸私等に何やと申へと云てあなえ  
 ハ名うり統りといへともは後時お申り古刀折をき  
 て服切事ハ悔とひきあへんとて先為横等々大將  
 誰くやと出雲へ格長驚く目にびくくする等生の大和  
 中尾乃氏詔雲林の四と云うてハ子細もあらざる  
 と云後とてあうと申云代傳くくると又我う代め



せしむるに伊勢國の役人年長野譜代初  
 戸の新築し名を絶くもお物と持て用ひしは  
 物も絶る其時大抵大老と彼も月保入死と  
 してしむるも多し加へる股の下脇を挿入し一握と  
 繰拳し投げしに脇の中へ放しきり弾地と  
 して即斬ひ殺し様は死より角より夕陽  
 よぬぬも八景造りてをきくしは戸の門より入る今  
 八角とけりい言後の酒と始めつ二人乃小姓行末の事た  
 ち墨物具脱捨しる櫓は騰り敵の勢中へひうつて  
 本名をとりて此夜去陣の末をみり敵を露と

して天下乃法用にあつる今日の事候と云に随ふ  
 かりしとあつる物家の此の所給よりいふと殺さし  
 八幡大菩薩并武神を保護み伏の武士の腹切様を  
 みろふにえおとよとまに腹切文字に惣切膳と毫  
 切敵の方口方へ投散しその後陣中に火懸よと下知し  
 初をいの中に合みうろつと油はぬき死にけり敵方方一  
 交に回と感とつるは城の中に火の音をききしは  
 大老第一回腹切火中の城をぬきけり一色世保陣  
 生涯のまゝ八十餘を皆さうにきり言語道断り  
 吉に堪ふるは此夜一矢乃長将一命と表にきり事い



於乃悲歎を嘆く國家を埋むる武門の名をこそ道々  
ろろろ勇たつあゝあ近代ハ類をびと英國へいそろ  
へ一雙會張良武畧賊荒や一夫四海乃勇賊縛て  
わろろ御禁憤に二何あふ一命を陣危の塵に果  
ゆるうきの末をえん末あゝ時今あ日る根歸へく山  
河乃一夜の裏ハ類をわて多く乃山岳う十河大地を  
一時小殺せりこくに如事言詔を絶ゆるの次方た  
之は事如いづ後をまけき一こそあきになをくみ  
ふ年乃四こそ男元た皆一統してわいひ定めくつる  
をハ一こそ乃公席彼一跡後をくそかにいそ堀河乃

亭公席お煩のふ分國はわてい忠にふる追て御成敗  
まゝこの中ふ凡と未乃生涯を送るあゆみかきと  
あゝ誠ハ跡をた流すても情ハあまふのろた京吏  
平生の情と旧恩内外の情は時ハ類をわて老翁人  
も一命を惜まざる事近代ハ類ハあじと京中と合  
へる去程に老翁竊くと談合のりめをえん方乃席下  
知とて此方評煩の敵万より責めるへ一今夜才  
乃あは壽様乃也よおあハた餘の義元ハあておて  
討死とく一宿をたハ悉火を熱て腹を切へさなる  
終夜ハ酒盛煩乃舞最後乃遊也寂なる亡程やふ小



とて一とおちとて十六日未明あまの軍勢み席り下  
知し随ひつた日擲る言を数々聞かして挙ふけり  
わらも用さる事あまはれ有餘亦已満のまゝと云  
切ておちる家も夫瘡めにしと究竟乃日密に密  
を並べてあしに詰まて射多きとも是を目し知る事  
あしおちひ切する若しはち方へ切て知る程にあま  
本紫の風も頻りふくことくも里れおちるの日は龍  
み十六十七日餘の年あまはち方へ切て指馳めて出  
のまゝとあまはち方に流陀觀音の名号と唱ふまも  
何れは最後一息の入観は住するまも何れはち方へ取

合を這に這とおちりしる若乃ちと降つて皆一同し  
腹を切る熱りしる衆地の地へ入る人もおち大踏へおちる  
若しはち方に切ひ各名号を名あつは皆切死して死す  
怖りしる此衆障因果のあしりしるへは漢朝の武帝の  
烽火は國をまひわたり玉藻はあはに國に化生して上佐  
乃人を誰とてしるへは地獄のまゝとてしる活地獄に教  
生の報と面しおちるまに眼は怨敵の若とてみ億兆万  
の害心ハ一念の瞋火之殺生之業に盡る穢れんの康は還  
るうきくをのゝ穢の元をもつて互に血肉と亂れり  
とては活きのあしに頼りしる又極苦の形を更なる極











置へる様あり見ハ四歳也ハ之衆之衆のこゝ長年乃  
冬に義法の子少く石をくもて龍興に兄弟の義  
衆を多く上るを既く失ふるへりといふ或人曰依て  
者其爵を助けをこ出岐に就けりといふこゝ  
隠るゝとして二年過て後當廣院後嘉吉元年 六月廿四日 伊勢國  
以後二人兄ハ七也 弟ハ六也 慶雲院後今ハ不使ふなり  
伊勢國をくふといふを安堵しをも面るに人々不  
のりひに七也の兄弟をくふ是なりといふ  
て也世保名を相續して今に不使甲斐なりといふ  
當年應仁大乱出来しといふ方陣勲役の事あり

今度伊勢國進入なり今も河原所を助け人  
いと云ふことにて國中をみせし初め國司乃ち  
勝て世保を返すも終は世保をえしと云ふ  
行と執沙汰を建てる合戦若干の事討る在り損  
減より角を生り山家の旅客の栖もふりし終に  
にもありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事  
たあるハ帝都乃ち吉と云ふ風情之を候はれ  
都に難掌なりと云ふ事ありと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
云々使ふ伊勢聖護院後あるといふ細川後



也而るに聖護院後大峰七十日乃大行中叶向へり人  
 とは返事あるといへども沙使あふまに成ぬまハ初行  
 企て難行も天魔の不行と見えつて大行と破り伊  
 勢國へト向あり今出河後と同道し終る同十月都  
 の月に沙使あり件の天魔大行と破り事疑ひか  
 しく云く次は清土寺乃沙事若ハ清和源家の武勇  
 と道志忠田僧正の室に入り田家之家の棟梁小岳  
 一送那止觀の源流とんと乃月は流し終るありと云  
 明生死の順波に催されて再俗塵の家は還り今初  
 濁乃逆礼は保み花洛を上帝都に位と喚難を量

乃世界悉壇昨今五年の往還に何と人傳せり  
 根高位の上より通達終る人角て時日と送るの程  
 亦泰洛乃時を待て公方の所軍に入終るに去る年  
 大和一同の所部として一諸礼と私乃終ひ出来と云伊  
 勢也 貞親 後終る後伊勢國 開成五年 止と云再泰洛  
 と遠く文に公方様御許容にありと押へて出洛し  
 云く時分落首河架  
 何事も皆束の世にありと云伊勢物語を人なり  
 細川八里中とありと云ありと云は里とありと云里  
 時刻公方沙使終るにわかれ機を貞親王様の極あり



あつた時定之と沙汰ありて裁後あつても細川辺の計  
畧によつてと方とる今ハ理運にも入つてと方  
細川後継の故あつてさうも城の所よあつて  
今ハ出頭乃難事とあり再沙陣よ安懐とむむあ年ハ  
内ハ將より昇沈若く細川乃多に随ひて風情言  
道あり天子のやハ事今出の後ハの所ハ所服と云  
に對して御迷懷乃目録とあり去謂て下ハ  
何を智人ハ名一周の新報とて一ハ沙技持を放  
ちて既に是代ハ乃ハ父也親縁近縁乃名と列せ  
主城乃内とありとて押へて歸洛後意とて御科目

と沙とてとてさうもあつたの所ハ事乃留り遷りぬ今日  
ハ御お法眼近とありとてせとて思後ハ放ち  
らハ後乃中れおねとてさハに去年七月<sup>始</sup>今ハ河後所  
生煙負親造とのお話あり今には禁憤とてさハにま  
て沙流のとて成てハ亦後とて安懐とて差やとて  
角や勢あり乃ハ思案とてさハに業のとてと魔の  
行とてに將よりとて叡山西塔院正教房に保運竊小  
作を合とて或時ハ中とて思ひあて山とてと事ハ小  
あり此身ハハり多くの差や留りとてとハ我もあつ  
不室乃とて此乃に西塔院は事ハ此の勢動とてとハ乃



卷之三

十六

谷乃衆議一統せしむるにふんはる方沙敵の沙法を如  
一山の力と嘆え給ふに終乃落居いふ三塔一味の衆は  
あゝんいあやとく清取あゝん給ふるふは事心教坊  
楚忽の振也二院争う遠慮あゝんあまにふりて西塔院  
沙止住叶ふとて東塔院東谷より移り給ふ南谷乃  
元法中余議を量にけり死骸のこゝけひあゝるに  
林乃死衆坊安樂坊は衆と始あゝるに諸元中随分の  
徒元力あゝるに仁日あゝるに山末代と云て地  
に墮るる叡岳の華卿張えの云争う當山乃末代と  
末末臨に傳へんや治るる西卿敵を評容けけるを随

一乃張ふと云ふの政を放るる是死を東北卿陣に□と  
是も名を一山乃月乃耀し沙法を果代の武畧に爲  
めんと只一筋おひひ定め回く肚合出川安法取一  
あ日して後王城西の接へ山名の陣へ登りける水代  
乃名争一山の名を答け事にある其よりてこそ王城  
の月乃東西二の接へをまつて用欄より水沙法をす  
る二人乃將軍帝知し辨ひて果暮年始ふ喜代を  
静好青陽小接する目景あるに和暖小あゝる水  
を連へるり平安嫌の名を背ひて修羅園静の園と  
成るる

巻之三

十六



追ふ部と國中は跡よりを許ひて一旦の欲情も多  
く者を損滅せし初たハ國司の御勝て世保を違は  
申はて世保を念を交へて爰の中に快楽に誘は  
りて人々を誘ひてハ伊勢國神部と申す所ありて  
國司群衆世保を亡せしと宣後為るは働きて陣屋  
に火懸して生年北は柔服切りて誠は是蝸牛の角乃  
上に是氷を許ひ石火の光の中に重欲乃火坑に入我  
□乃刀劍に懸まり顯戒論ふく初効の初際ハ依正俱  
に安なりと過世已未ハ<sup>南時</sup>實難競ひ起る所以は親を  
般あて百王に送し往若の普明ハ法將を百講は座

と難を除く國を護る事般若特りするなりと親  
しめは般若とい衆生の邪之毒ふ犯されしを我を  
欲を想の智ある未の面目ふとの中理なりと今日ハ  
の衆生欲ん熾盛にして是を勿神ありと有りて般若  
乃法證なりとも知を諸仏元生ん熾乃神なりとなす  
智ある利劍是を一天乃若主に人等護るは主室  
とも涉り知ありしなりとへこれありて聖人もなり求  
然るは佛も絶するも四部七元乃田戒の所持破戒を慚  
成して主嫌を始めてなりと破滅なり是を恥るなり  
ふより万民は法東漸乃大日本國を三惡道に成院し



我ハ何と人ハ何と云て二世を穿く者ありきりり六若に  
生還らん三質乃中に刀劔勃んで國と損一七難のつら  
惡賊難上下に互つて是一三惡道充滿諸天元減少眼小  
速る法滅の塵利難うたき道傾求淨土の懃勉さうん瓦  
周の難記往生仏土の末縁も命とつめ給へ

夢あるについでとて此と記すと覺岩山は叡山は良山大

天狗を乞請する事 太平記中もは  
先蹤あり

云一寛正六年 九月十  
三歌 流星の若ありていつくくあつと覺

岩のふのち常坊あ天狗を乞請と云量乃春属川聲  
して来る各談合河里と下乃主仁三人のふ入替んと云

當山ハ是南國丹波の鎮守あり佛法を門入んと護  
織方の俗方を八面に似や山門之井の賢と云ハ我請之  
と云く是時刻あることと云今夜流星山を示すと覺  
驚うさるる醉おのれ親の時代之度朝と云ハ思ひのまへ  
吾う日本國と云は法亦漸くといふといひふ時と云  
うりといひ合は次は叡山は良乃山容童等在家俗  
めハんあく思ふ食と云是其後覺岩の華山本等一  
度小頼と云と覺えて地も害と云世界の損滅と云と  
覺えて四方へ探と云ふより言福道ありと云山門之井  
乃賢と云何やらん山門跡多近年の神思と復歸と云給



へりし人され先三門之學其一行淨土寺所之忠  
信乃正以遮那止觀乃法道北十餘年之の御勤將  
上は都鄙往還乃其終り西の將軍とて海内不安の  
也根元と仰くまゝ次は三井のつゝにハ智院西園乃其  
一行聖護院の御門全流まゝと三井の法より洗淨乃其  
行乃の西入の首七年の首を満もして大峯葛本の大  
行を破つて今出河後再入洛の御使と成終り怖しく  
は企て上は記もるゝことゝあ之ヶ度ハ所禪還あり頻  
は上之を勸めしも丹波のち護細川後のは入るゝこ  
於岩山の讀合一事遠ゆ事あり害魔降障の遠き

疑ぬふよりと山門之井のあつる今に目か度西の權へ  
に并んて其信を改道し終りやあふ先使改悔發心勸  
化の御計より殺鬼短を求むる何れを身を護るゝん害  
魔間を御め何れを信まゝとんや止て榮ゝやと  
とハ身を去るゝる貪欲捨て捨て除る難さハ其身を  
惱まると名ひ促して廻るゝハ我を保るゝ妙の命去く  
て海くゝるハ若しんなり我形多と判り終り官賢に  
我執偏障の情量るに止すゝ人なりと折言ふ定魔官振  
動の刻大目經の十條の法をりて我ハ自空の境と  
取くへ一執る滅度二千四百餘歳五百歳遠渡妙道乃



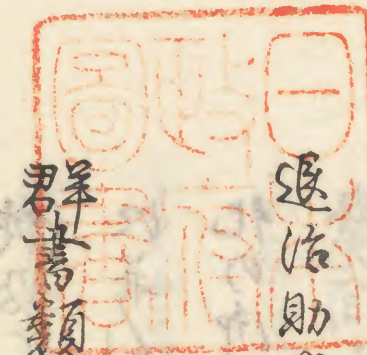
三十三

四十三

内なる佛法の倒底を擧げんと欲するは眼を透る  
然るのる根弱を果する眼を共に今日の元生上下  
万民我執驕奢の怨室に入里欲情主醉の毫河は漫と  
才六丁の魔氏千餘列は逆る順逆乃二縁は乱世に驚  
さして家一の法道一人として順流の十人を止んと欲と  
為法無有のことも然と見えたり秋氏沙門の如くのこと  
く況や吾等佛法の尊聖教滅を眼をよりいふ事なり

退治助用の要術を教んや

群書類従巻第二百七十七下



修  
聖和  
内閣文庫



